

第四節 機先を制せ

攻め合ひは互に敵氣を奪ひ氣勢を破り、其氣を制せんとするの方略にして猛氣の戦ふ處なり、攻め合ひには敵の青眼に對しては中段又は下段に攻め、敵中段にて攻める時は、中段にて防ぎ刀を返して青眼にて攻めを破るべし、敵攻めが中段下段なる時は青眼にて刀尖に咽喉を着け一步先に進み敵氣を突き破るべし、此の攻めは勝敗の別る處なれば、即ち業を先んじ制すべし、而して攻めるの要の變化は青眼對中段、下段對青眼、敵の起る咄嗟其先に變化するを要とす、而して變化は虚實にて以て敵に對し或は應じ、其機を制するに在れば身體の進退捷徑自由にせざれば、其一步を先んずること能はず、進退自由なるときは、變化の際有利の位置に在りて、其機を制するを得、進退は即ち間合の掛引之なり、若し攻めて、變化不利となる時は、直に其間合を離れ守り、敵の侵入を防ぎ有利なる時は直に進む即ち瞬時の利益を見て進退自由とす、之により攻め合に勝つを得べし、此進退の自由は、左足一足（送り足）の徑捷なる働きにより爲す、譬へば敵の處作に對し攻勢を取る時は、左足を右足に揃ひ、中段となりて、攻め入るべし、此時敵青眼にて攻め返し來り我不利とな

る時は、左足を元の處に引けば侵入を防ぐ、此進退により、攻勢を機敏に施すことを得るなり、或は我れ左足を揃へ攻入る時、敵に隙ある足踏の間隔狭少なるが故に、進撃突入せんとするも容易にして、此の足踏徑捷の働きによりて敵を制し得るなり、所謂間合にて敵氣を攻め、壓制するの秘訣なりとす。

以上の攻制の形状及動作は、尤も複雑したる精神の反應作用に隣伴するものなり、而して其の反應は知的作用、辨別作用を含み敵の合圖によりて觀念連合し、反應作用を完ふするなり、之れ心理なるが故に後章心理の説明によりて會得すべし。

第五節 動作の演習

「中段攻進」互に青眼に對向し、相互にて練習をなす、敵青眼に構へる中段にて攻め一、元の位置に復す一。

「下段に攻め進め」敵青眼に進む下段に攻む一、元に復す一。

「中段攻め返せ」敵中段に攻め竹刀を下へ潜らせ敵刀の上に乗せ、稍や斜に其の刀を押へ直ちに

青眼に進む一、元に復す二。

「下段攻め返せ」 敵下段に攻め進む青眼の刀尖を胸部に着け、其の構の竹刀を壓して進む一、元に復す二。

「青眼攻め返せ」 敵青眼にて攻め進む青眼の刀を下に潜らせ斜に其刀を拂ひ中段にて刀尖を胸部に着け進む一、元に復す二。

「左右攻め進む」 敵の右拳を目標として其左右側面に刀尖を變化して攻め進む一、元に復す二。

「上下攻め攻め」 上は刀尖を胸部に下は中段にて鏝下に敵の直立體中心に刀尖を變化して攻め進む一、元に復す二。

第六節 變化と攻進一致

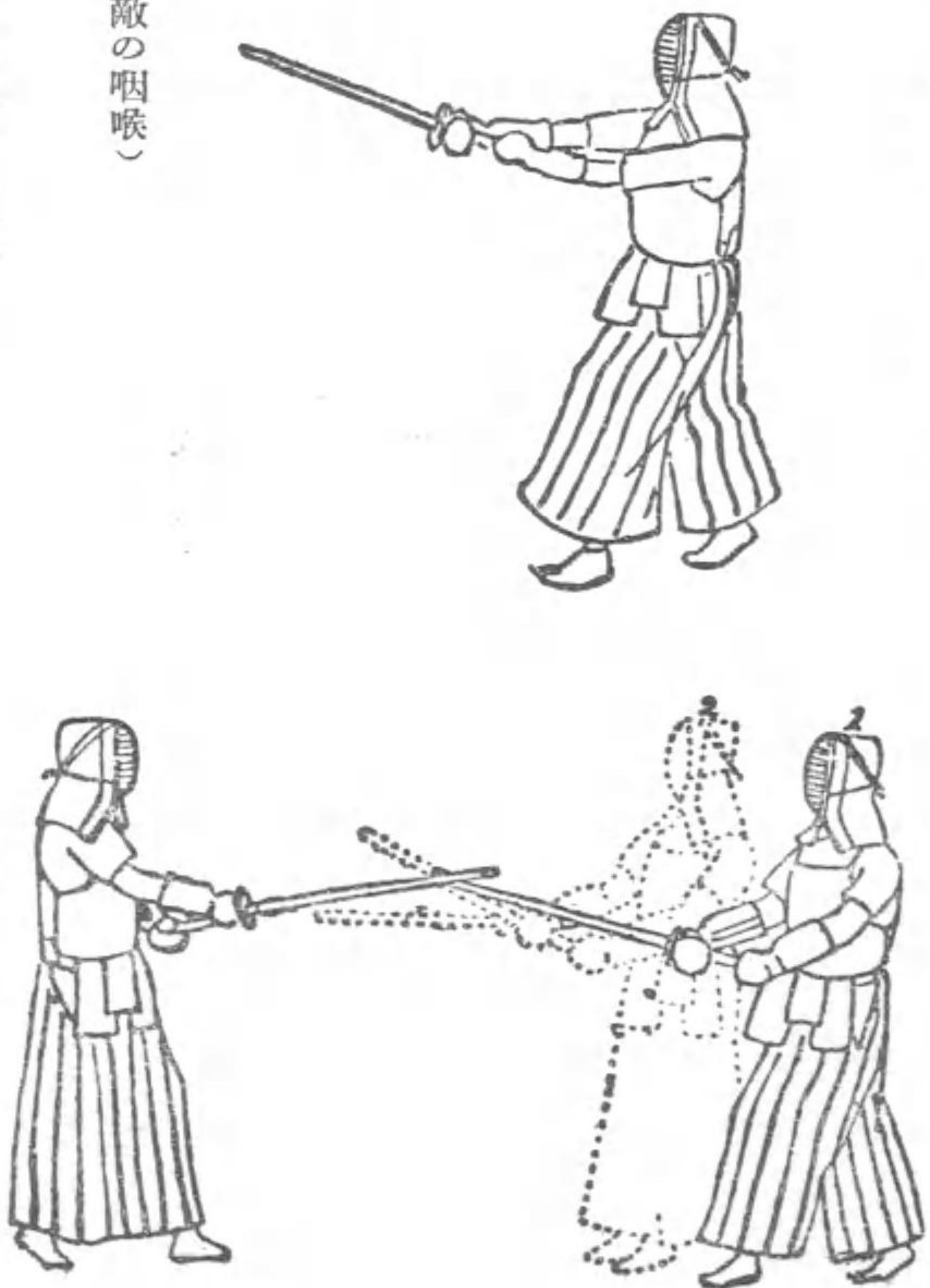
攻進は青眼より圖の如く敵手に入るを以て攻めを施し得るなり、此の攻める場合を圖の如く攻入の時右足を揃へ、敵之れに應じ攻め返す時には、直ちに左足を元の位置に引きて其攻めを防ぐなり足を揃へしを送り足と云ふ、送り足は順次進退に行ふことを得べし、而して攻制は凡そ圖の如き敵

構及應ずるを崩し、其の崩したる瞬間圖の如く刀尖を胸部に着け敵手に入るなり、是れを以て敵氣を制するを得べし。

竊み足の攻進

此の状態にて敵の咽喉に刀尖を突け進む、去れど此の攻進は、手の力弱く拂ふ時は、直ちに體崩る、故に敵の状態は第二圖によりて敵刀を拂ひ攻進すべし。

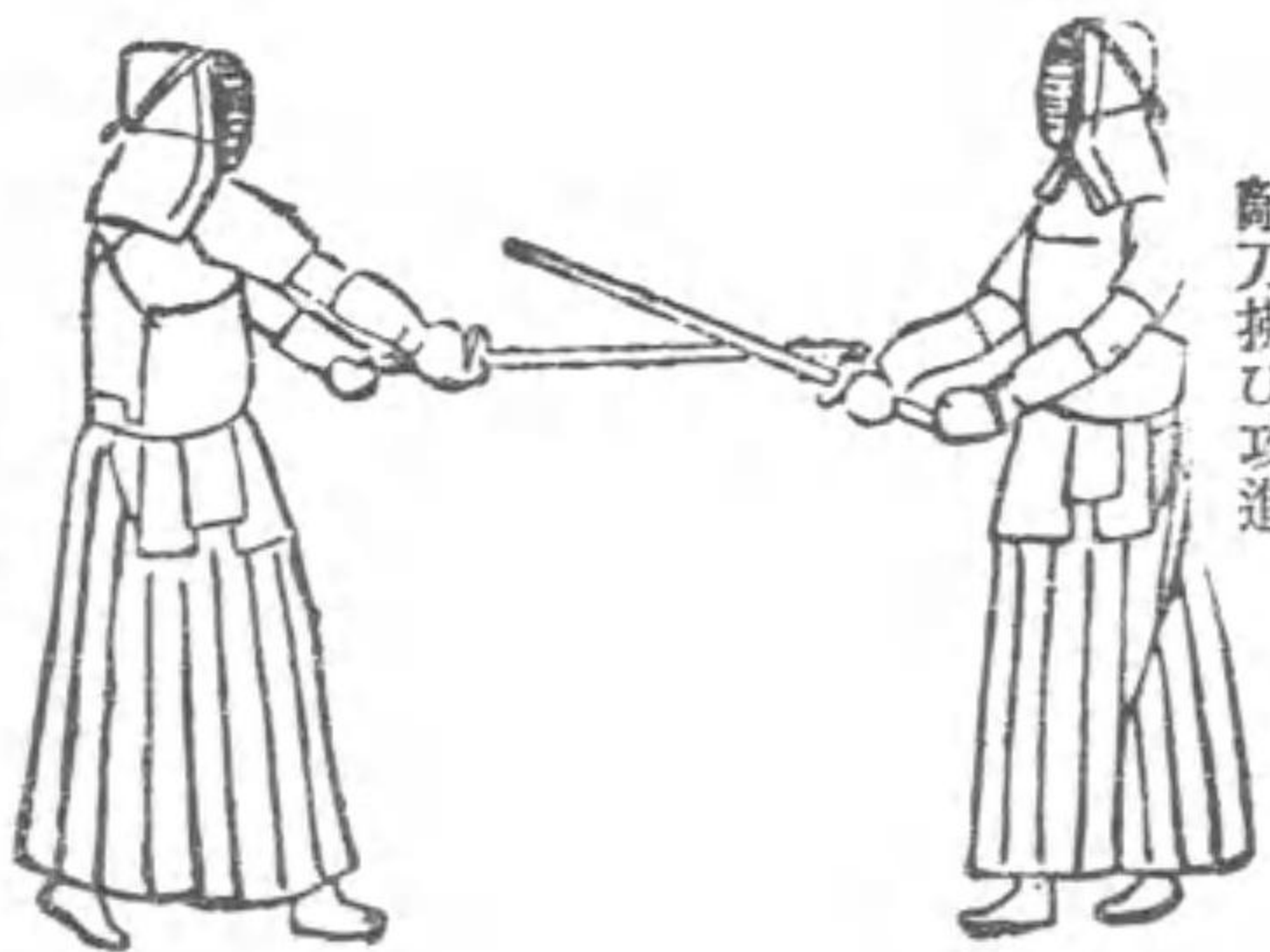
(敵の咽喉)



一、敵の起りし竹刀を斜に崩して進む。

- 二、敵の攻めんとする時又は攻め返したる刀を横に拂ひ崩して進む。
- 三、敵の構刀を斜に崩して進む。
- 四、敵變形の刀を押し進む。
- 五、防拂、思料及意志回復せんとする時は其竹刀を崩して進む刀を崩さるは拂へ押へにより竹刀の正確及び活動を崩すなり。

第七節 釣り込み (應じ返し)



刺撃するは敵を制することを目的とす、即ち刺撃せんとするには、先づ敵を抑制し敵の整然たる構の秩序を乱さすべし、秩序乱れたる瞬時刺撃し、又其を制するにあり、間合進退に於て敵に對し變形をなすは之れに未發に敵氣を抑制し、又其整然たる體形を崩すにあり、故に青眼より中段下段に變化するときは敵氣變化し、構形自ら變ず變化の際敵我變化に注意する時は之れを我れに奪

ひ制するなりとす、即ち刀尖變化する時は構形變化の何れを問はず、敵氣は我變形のため變化するなり、故に氣に隙を生ずるなり、即ち氣變化する處自己の構形に注意心を缺く處にして何れか刺撃するの際を生ずる場合なり、左に變形により隙を生ずる敵の變形を説明すべし。

- 一、我刀を下けたるに應ずる時は突き面に隙を生ず。
- 二、刀を上げたる時應ずる時は甲手に隙を生ず。
- 三、中段を下けたる時應ずる時は横面に隙を生ず。
- 四、刀を左斜に押す時應ずる時は隙を生ず。
- 五、攻めにて青眼又は中段に固守する時は甲手に隙を生ず。

以上敵が我が變形に氣を集め、應じて變形を作り自身を防拂、又は守らんとするものなれば、敵の思ふの以外に隙を生じ、之れを制すること容易なるものなり、所謂形狀變形の以外を牽制する時なり、即ち一方に氣を配り他方を忘るゝ時を作らすものなれば容易に制するを得べし。

以上我れ變形をなし、敵に其の形狀に注意し、之に應ぜしめんとすれば敵氣を誘ふとも云ふなり即ち釣りを釣り込み擒縦自在と爲し、敵の刺撃する手を押へ、或は其の竹刀を防ぎ、以て活動を制し

其の氣を制す、所謂變形は敵氣を我れに引き付け我心の思ふ如く、其の働きを爲すものとす、而して構勢は彼我共通の業なれば進退間に注意し、青眼を崩さず、其の變化に逆らはず敵の形状と反對に變化し、以て敵の氣を外づして敵の進撃を防ぎ、未發の氣を制すべし、斯くの如く未發の氣を制する時は、自ら敵の行動の意圖恍然として顯はれ、隙體を進撃するを得べし、若し我が意圖と同一の時は、自然の間形状變化して其の氣を釣り込み、敵の撃せんとする前途即ち其の起りの氣を制すべし、尙攻制の有利なることに對し、左に之れを詳解すべし。

一、相中段 相方中段の場合は同一勢體なり、故に刀を下より潜らせ敵の刀の上に乗せ青眼にて進めば其の氣を壓す。

二、青眼と中段 敵の青眼の時中段に攻むる時は其の氣を壓す。

三、斜構と青眼 敵斬撃せんとして竹刀を稍や上に上げたる時は、青眼の刀尖を咽喉に着けて進むれば其の氣を壓す。

四、上段と青眼 敵の上段構及び上段にて斬撃せんとする時は、青眼にて敵の左手に其の刀尖を着け攻める時は其の氣を壓す。

五、下段 中段の時は中段にて咽喉に刀尖を着けむ。

以上敵に對する變形は、敵の敵勢を壓する優勢の状態にして敵の機先を制することを得べし、而して此の構形變化敵の刺撃をなさんとする氣を制するを得べし、間に於て此の優勢なる變形に於て、此の優勢なる變形により第二間に進む時、敵の應ずる變化體を刺撃すること容易なりとす、敵若し先なる時は礮形より直ちに防拂し、後の先を制するに至難にあらず、間に於ける變撃攻撃は構形變化によりて攻め敵氣を壓し、之れに應ずるを基礎とするなり、而して接近したる時敵の上段又は斜構にて斬撃状態を示し、進み來る時は青眼にて刀尖を動かさず敵の處作に應じ、或は敵の起りの兩手を押へ或は起り頭に刺撃して制するの有利なる業にして充分練習すべし。

第八節 精神牽制

攻勢に於ける氣を制するは心の發動なり、即ち精神の戦ひと謂ふべし、攻める間堅忍不拔にて確實なる精神ならざるべからず、其の精神によりて氣の働きに物を狭むことなくして、心の明を失はざるなり、即ち心の確固なるによりて敵の隙を制するを得べし、一心岩をも通すとは、即ち是れな

り、故に凝結せる働きは敵の處作に對し、其の敵氣の狭む處を制し縦横無盡に活動するを得べし、故に常に練習には自巳的精神を斷滅し、心を清爽に置き一念に凝らし敵の活動は明鏡止水の心を以て察知し、之を制することに力むべし、斯の如き心には敵もなく我もなく、心身共に生生として敵心自ら我れに制せられ、殺活自在となるものなり。敵心を制するに尤も有利なことは、凡そ左の如し。

一、中正の心により變化すべし。

中正の心は敵の處作に氣をがす、敵の動隨の如何によりて其機宜に對し變化自由とする自然力を云ふなり、之れを有形の動作より説明する時は青眼之れなり、青眼にて敵の處作に嘸じ、其の青眼を崩さず、敵の中樞たる咽喉に刀尖を着け攻める、若し拂ひたる時は其の力によりて反對の方向より直ちに咽喉に刀尖を着け正眼に復すなり、之れを攻め返しと云ふ。形狀依然として崩さざる時は正中の心自ら乱れず、進退間斷なき時は遂に敵の心を制するに至るなり、故に左の動作を實施すべし。

一は竹刀を下に潜らせ二は咽喉に攻めるなり、此の要領を左右に施し漸次機敏に施すことを習熟すべし。

すべし。

二、思はず制すべし。

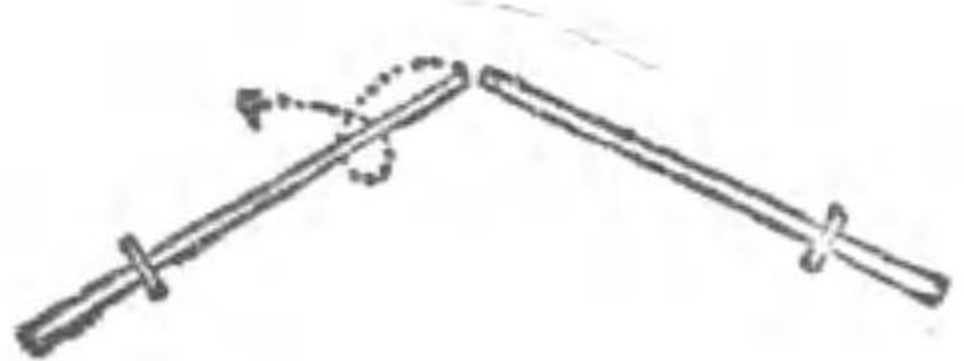
無念無想に合する時は勝敗なきものゝ如くなれど、決して然らず。無念の對象は同一の心の合致なり、心は氣によりて感動す、故に心の合する時、敵氣動く時は無念去り其の動く心を制するを得べし、故に氣に發するも業は雜念生ずるものなれば無想を以て制すること自在たるなり、之れ無念にて敵心を制するの方なりとす。

第九節 攻勢の利害

攻勢によりて竹刀を變化する時、其の變化によりて利害あり、故に左の動作を練習すべし。

一、青眼より上に手を伸ばさざること。

攻勢するに竹刀を上げ兩手を全く伸張するときは、氣上釣りして其の状態極めて弱く甚た害とな



るべし、故に上下の變形より必ず青眼せいがんに復し、固守の體勢となり、常に變化自由へんくわじゆりゆうたる構によりて攻勢を採るべく之れ尤も有利なるものなり、故に上下變化より青眼せいがんに復して進出すること習熟すべし、去れば自ら敵氣を制するなり。即ち本體ほんたいの青眼を守り、變形を瞬時に行ふ時は進出しんしゅつに伴れて捷徑けんけいに一連絡を取り攻むるを要とす、而して變形は虚きよにして青眼を離はなれたる變形は効をなさず、青眼を中心とするは變形をなし青眼せいがんに復し、自己を守り敵の形勢を崩すにあり。茲こゝに於て應おこじ變ずるものなり、變形して其の青眼を崩すは攻制の本體ほんたいあらざるなりとす、攻制せんとするには青眼せいがんの本體を崩さず而かも變形を一連に爲し以て敵の間隙を刺撃すべし。

第十四章 攻 撃 法

第一節 要 領

攻撃の攻とは攻める意にして前述の如し、撃とは其の攻めたる意志の止まらず、瞬時尤も機敏なる活動の下に刺撃を施すなり。間斷なく攻め刺撃に變化し出沒自在しゅつぼつじざい之れを攻撃なり。此の處により

て敵に抵抗力を失はしめ、活動力を壓伏し拘束するに在り、即ち攻と撃とは決して難れたるものにあらず、常に一連たるものなり、攻める變化の際は堅城鐵壁も突破するの勢にして、或は攻めにより敵心身度を失する瞬時際かさず、縱横無盡じゆうわうむじじんに疊みかけて切り捲り、敵の主力を皆殺しにすべし、故に攻と撃は敵の眩暈けんうんせしむるが如く、常に相俟て施すべきものとす、何れが一方機宜を失ひ、各々立木の如くなるときは、却て敵の侵入を受けるなり、既に攻めに對しては説明せる如くなれど、尙ほ茲に攻撃を主として、説く處あるべし、攻めは氣力の發動にして、各動作にて熟知する如く、竹刀及體勢を變化し、敵を攻むるは其の變形變應の際、其の精神統一を散亂せしめ、油斷を生ぜしめ、又刺撃を誘出し、心理の状態を變換せしむるに在り、其の心理状態の一變は澄心攪亂たうしんかくらんし、徒らに澄心浮氣勝心の有我となり、自己的觀念を狭むなり、故に自ら破綻する心に變化す、之れ氣燥り眼の眩む時にして、敵の隙なり、我れの刺撃を全ふする處なり、刺撃を施すは雷に形狀の如何のみにあらずして、要は以上の如く精神にあるなり、彼の試合上に於て、敵刺撃せんとする瞬時我れ攻める敵之れに屈せず打ち來る時は、落ち着き意志を以て其の出先を押へ、敵の體勢を破れば敵猛氣を挫き退却す。此の敵體を破れり形式的業の巧妙なると精神作用の一致に依るなり、故に敵の處作

を挫くは心正確なる働きによる體の變化と謂ふべし、攻撃の移りは極めて隱微なるを要とす、左の時機によりて動作を練習し、依て此の精神統一を修得すべし。

攻撃の一瞬時

- 一、敵の體勢を乱し又は防禦せんとする時
 - 二、敵の志氣阻喪したる時
 - 三、敵志氣を快復せんとする時
 - 四、敵刺撃するを躊躇したる時
- 以上各項或る一焦點を凝視する時は敵の意圖鮮明となり、我が心統一し、遂に敵に應じ、或は變する行動は統一的に行ふことを得べし、即ち敵に一心を以め其の行動に應ずる時、自ら不知不識の間我が行動を爲すに至るべし。

第二節 動作演習

我が氣の變動するときは、敵氣之れに依つて動搖し、構形を崩すときは、敵氣の隙にて正面を打

つ、以下要領同じ。

第一 中段攻進

「中段攻進正面を打て」青眼より中段となり攻進し其の場より竹刀を摺り上げて正面を打つ。

「中段攻進前突」

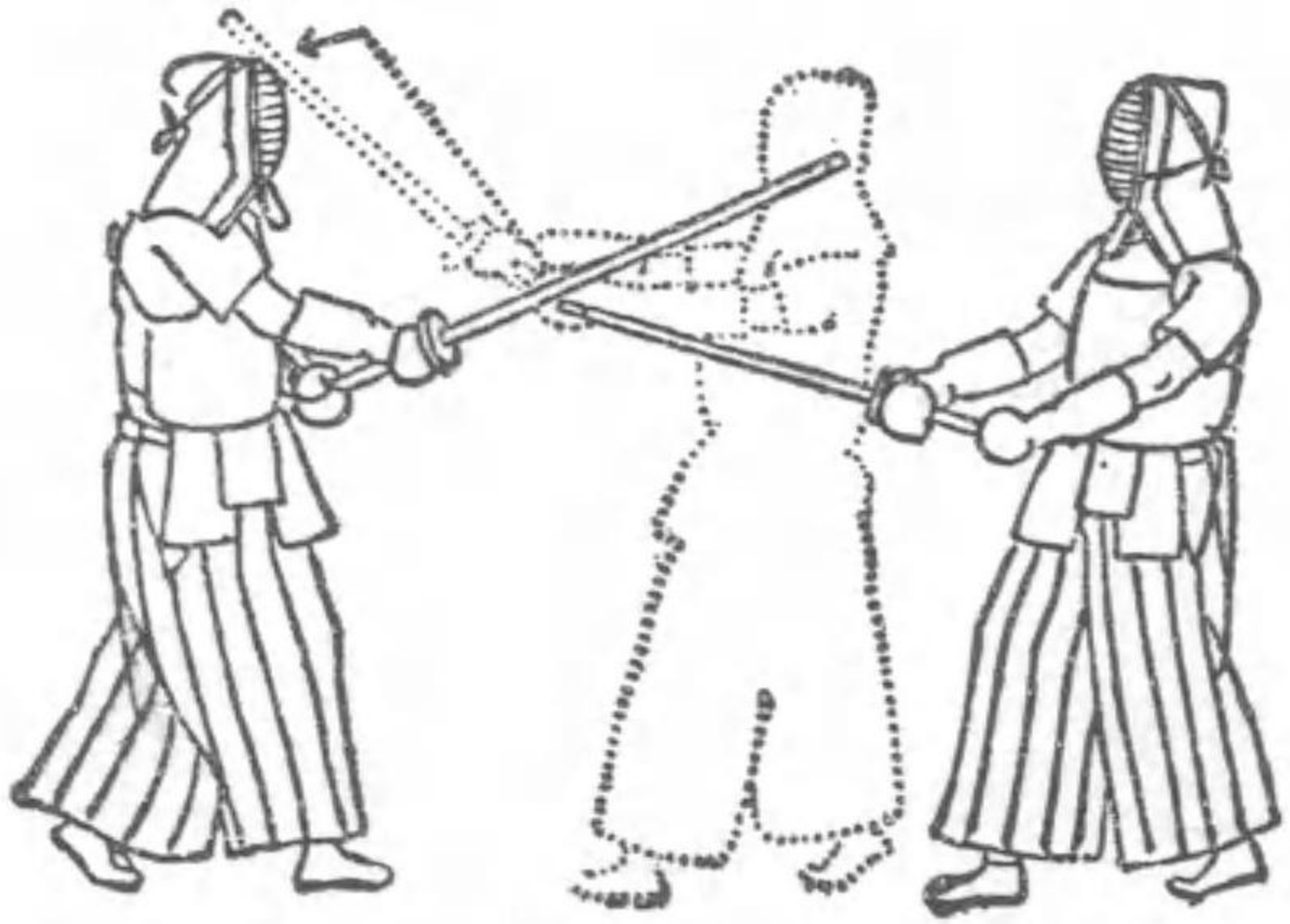
「中段攻進右面を打て」右面を打つは敵の中段となる處斜に外し、右横面を打つ。

「中段攻進右甲手を打て」斜に外し其儘甲手を直に打つ

第二 斜下段攻撃

「斜下投げ攻進突け」體を稍や斜とし刀尖を圖の如く下け攻進し敵の刀を押へ或は青眼にて迷ふ處黒點に刀尖を返へて返し突きを行ふ。

攻撃法



中段攻め正面を打て

第二 左押へ中段攻撃

『左へ押へ甲手を打て』 左へ刀を押へ敵の刀を抜き返さんとするとき摺り込みて甲手を打つ。



斜下段攻進返し突き



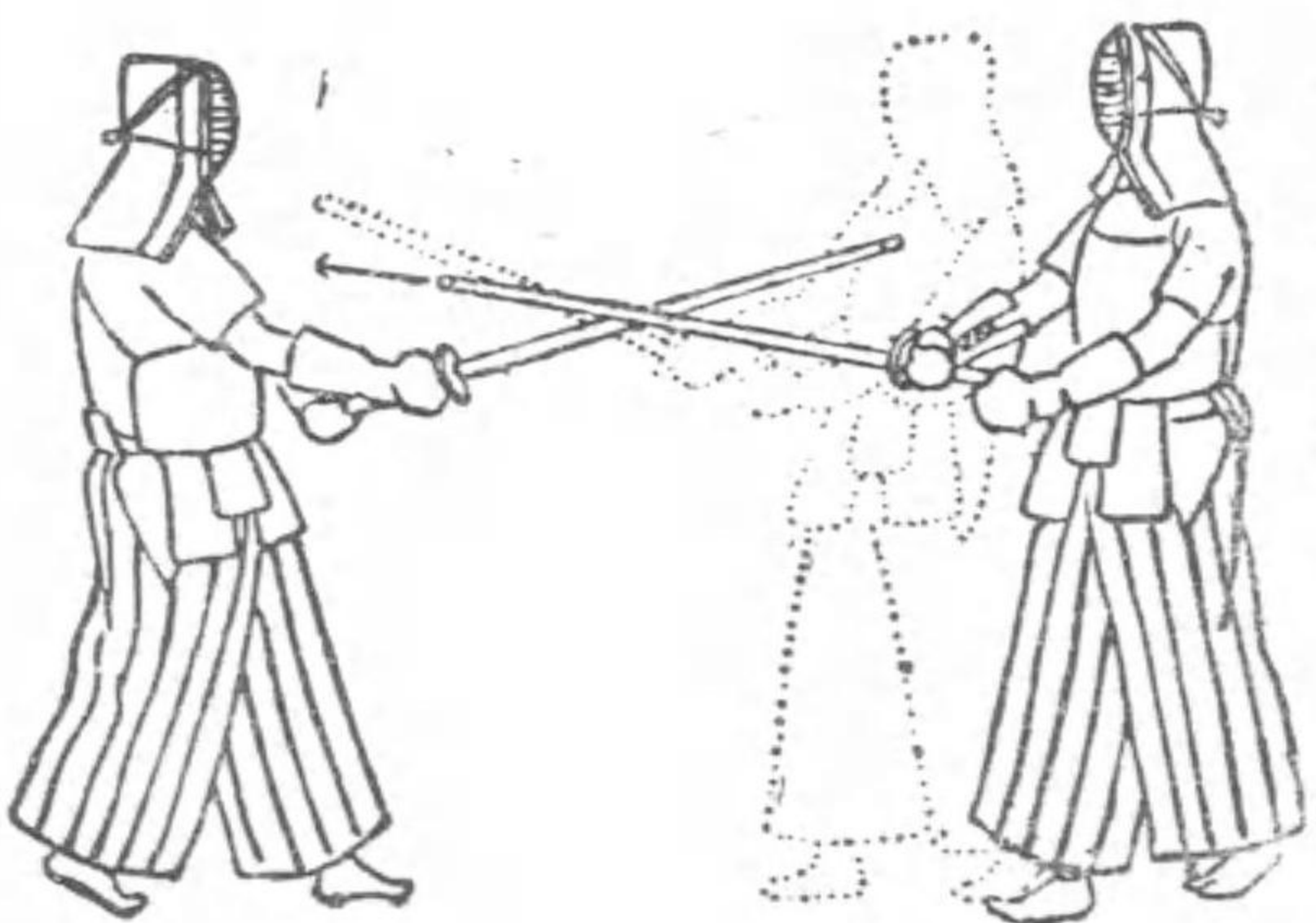
左押へ中段攻進甲手を打つ(半青眼にて押へ)

第四 押へ中段攻撃

『押へ中段より突け』 青眼の刀尖を下に押し落し中段より突く圖の如し。



中段押へ攻進突く



青眼攻進返刀を押へ進め

第五 青眼攻撃

「青眼攻進刀を押へ」 青眼より稍や刀尖を斜へ返し中段にて攻進し刀を押へ青眼に復して刀尖敵の咽喉に着け進むべし

第六 上下攻進

「攻進返し面を打て」 上下に攻進し敵の形状と反対とし敵の刀尖上りたる時摺り込み甲手を打つべし。

第七 誘 攻 撃

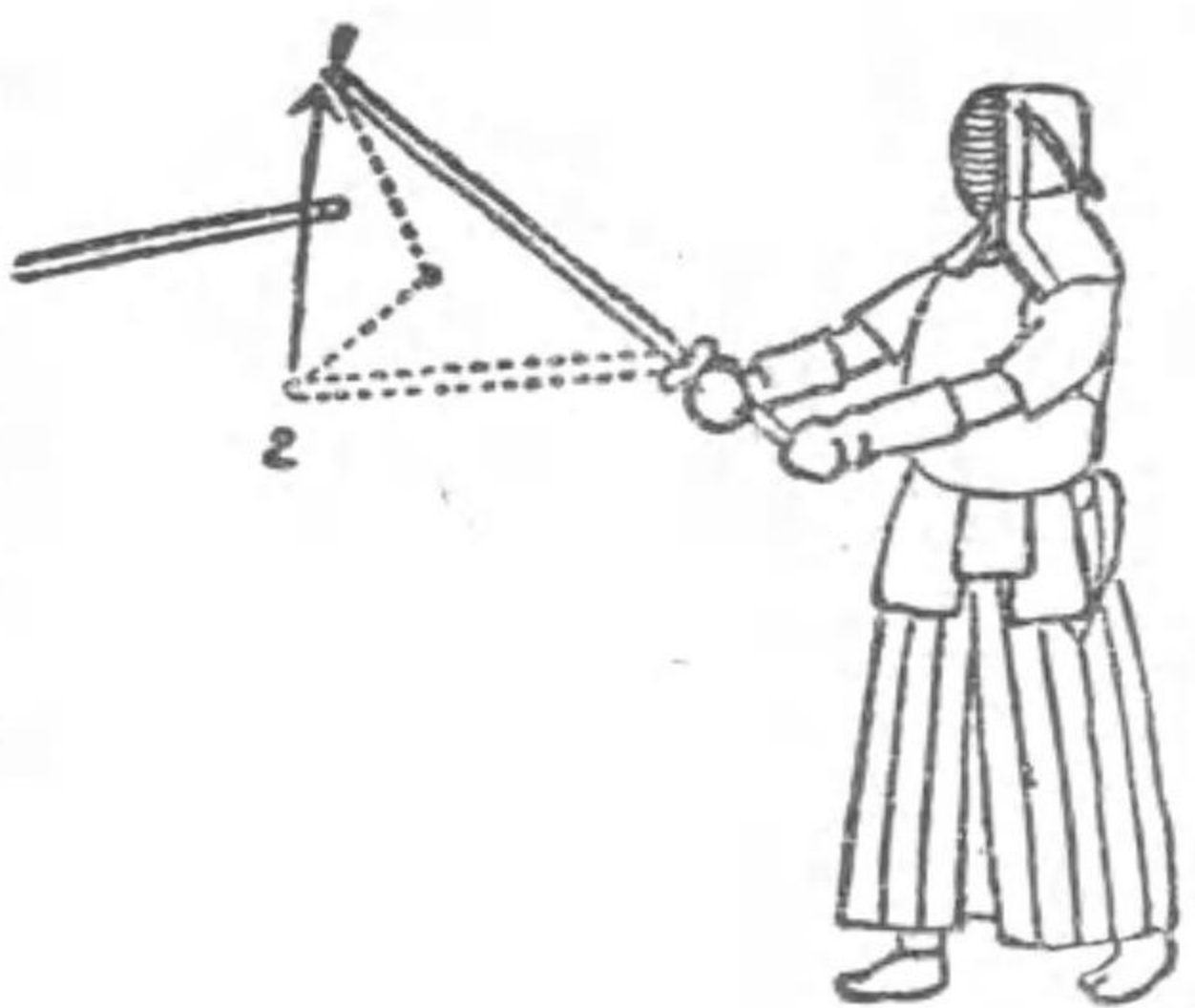
攻制より圖の如く一の竹刀に變化するときは甲手に隙を生ず。攻制よりこの時は突き面に隙を生ず、左の演習によりて敵を防ぎ變撃すべし。
「面誘ひ洞を打て」 刀を下け面の斬撃を誘ひ下より竹刀を斜に上げ防ぎ左へ返して右洞を打つ。
「甲手を誘ひ正面を打て」 甲手打ちは斜横に刀を防ぎ正面を打つ。



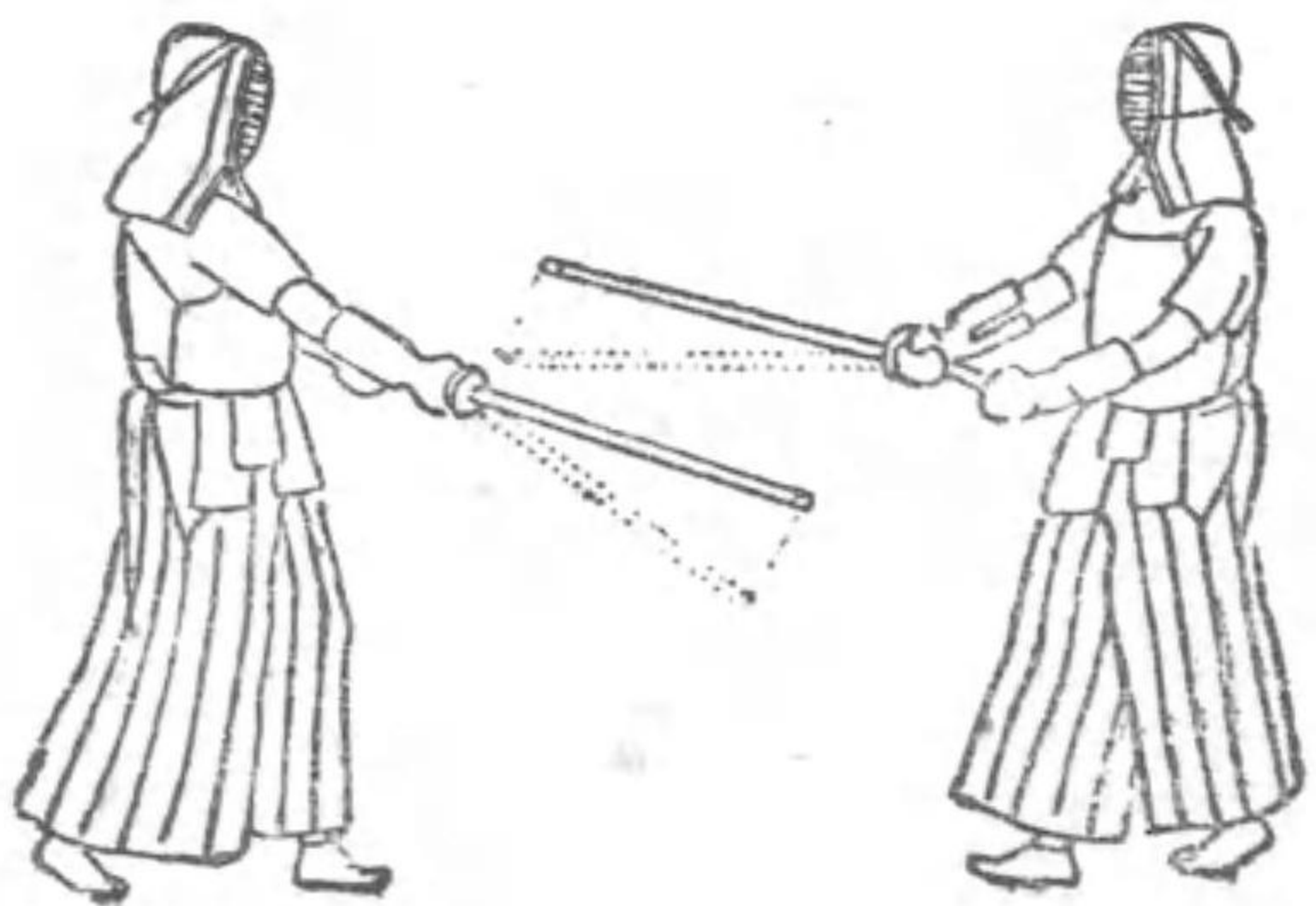
「突きを誘ひ返し突け」 竹刀を左斜に返し落し前突を行ふ。

第八 斜攻進の變撃

「斜攻進前に突け」 敵の中斷の時刀尖にて刀腹を押し前突す。



此の一線に上下する時は攻とならず隙を生ず之れを誘ひの形状と云ふ



斜攻進右面を打つ

第三節 動作應用演習

- 「下段横面を打て」 敵の下段にて攻進する時右足より退いて右横面を打つ。
- 「甲手誘ひ横面を打て」 敵の甲手を打ち來るとき右足を引きて横面を打つ。
- 「上下攻め甲手を打て」 第七圖の如く上下に刀を變化すべし。
- 「攻め返し面を打て」 敵攻制の時は竹刀を斜より返し拂ひ攻制を防ぎ面を打つ。
- 「攻め押へ返し攻め」 敵攻制の時は竹刀を斜に返し下に押へ反對に進みて攻め返すなり。
- 「斜外して突け」 敵斜構にて外したるときは突く。
- 「釣り込み逆胴を打て」
- 「追込み突け」
- 「袈き浴し攻突け」
- 「全體攻め返し」
- 「攻進退面を打て」

- 「中段攻進右胴を打て」
- 「青眼攻 右胴を打て」
- 「突誘ひ甲手を拂へ」
- 「突誘ひ逆胴を打て」
- 「返し攻め追込み突け」
- 「斜攻進前突け」

應用修熟の注意

- 一、精神を牽制し業を制すること
- 二、業を以て業を制すること

第四節 柔能剛制

柔能く剛を制する如く敵の力剛なれば受外しに依つて、其の力を利用す是れ柔を以て其の剛を制す、之れ劍術の業たる眞價あり、剛は敵の打たん突かんと攻めて、竹刀を押へ拂はんとする敵の力なり、其の制せんとするとき敵の力を利用し外するもの柔なり、左に實際的練習を説明し、應用動

作を爲さしむ。

- 一、敵我刀を押へんとするときは下より上に抜き敵刀を横に拂ひ突くべし。
 - 二、敵は刀を返し攻勢に出づる瞬間又は甲手を打つべし。
 - 三、我青眼の刀を攻め返す時は下に潜せ甲手を打つべし。
 - 四、我咽喉に刀尖を着けて攻める時は抜き胴を打つべし。
 - 五、敵の横面を打ち来る時は體を落し逆胴を打つべし。
 - 六、敵甲手に来る時は右横面を右足を引き半身に打つべし。
 - 七、敵の正 面を打ち来る時は抜き胴を打つべし。
 - 八、敵竹刀を上げて打たんとする時は其の起りの甲手を打つべし。
 - 九、敵甲手に打ち来る時は上段に抜き正面を打つべし。
 - 十、敵體當りは斜に外し斜打ちに面を打つべし。
 - 十一、敵足搦みの時は両手拳にて其の胸部を衝くべし。
- 以上敵の業を外し、或は 防ぎ體を崩す時の瞬間は、敵失敗したる時にして勇勢を挫き回復せん

か、又は退却せんとする時なれば、其の勇勢を挫き間一撃業を施すべし。畢竟するに攻めは勇勢を挫き撃は其の隙を打ちて制するなり。更に攻勢より刺撃の剛に出て敵柔を以て外したる時は、猛氣を失ひ活動を制せらるゝなり、此の場合剛を柔に變じ敵の一撃を加へんとする剛を瞬間に制するの措置に付いて説明し實施せしむ。

- 一、甲手を打ち敵外したる時は直ちに面を打つべし。
- 二、面を斬撃したるとき外したる時は直ちに横面より胴を打つべし。
- 三、右胴を打ち外したる時は青眼に復し守るべし。
- 四、突きて外したる時は接觸して斜構を守るべし。
- 五、横面を防ぎたる時は退却して青眼に守るべし。

以上の業は我が體勢に隙を生ずる處なり、故に斬撃外さる共刺撃の手の流さざる様に努め、外されたる刀の力は直ちに構に復す、他の業に對する様に練習を怠るべからず。

第二編 應用訓練

第一章 精神的訓練

第一節 要領

各教練によりて生理上、心理上順序的練習方法を述べたり、其の教練の結果は、自然千萬無量知るべからざる無限の精神によりて、其の正しき運用をなすに至るなり、既に劍術に於ける、訓練を盡きたりと雖も、其の深遠の理たる管に言語紙筆の能く盡す所にあらず、只だ精勵克己業を工夫精累して始めて、其深遠の理を修得し得べし、尙工夫の要として、實地的精神の活動、及其の修得すべき應用法を説述して修得するの一助とならん。

第二節 敵に對するの注意

敵對動作により攻制し、刺撃を行ふは、素より技術の精熟したるによるものなれ共、刺撃せんとするものは、攻制より電光石火に行ふべし、故に常に敵が右に来るか、左より来るや、如何なる意圖なるや、或は態度の如何なるやに注意し、其敵の應變の動作を窺知することに力むべし、敵の動作及作戰計畫を窺知するを得ば、連續變撃攻撃各教練を確實に應用して其計畫を破り、動作の際を制するなり、故に敵に對して、以上の注意力を養成、修熟し、變撃其他の教練法で正確に實施することを要とす、應用練習する間自然變形に對し無意識に應じ、或は應じ、其の正法を誤らず正確に施し得らるべし、無意識とは精神一物にも執着せず敵より撃ち、或は敵刀を防ぎ、直ちに斬撃すること、石火の機に施すを謂ふ、即ち敵來るとも其の態度を見るや、之れに應じ其の應ずる一瞬時に、善惡を撰ばず心止まらずして、直ちに處作に移る、之れ無意識と謂ふ、又氣の移りとも云ふ、心動かず誤らざる體を自信と云ひ、斯の如き自信を以て敵に對すれば、又如何なる咄嗟の出來事に相遇するとも驚かず騒がず、悠容自若として處置をなすことを得べし、故に敵に注意することに熟成すべし、熱心にして誠意正心之に熟せば自然心海は明鏡の如く、敵の術略を察知し、應じて住する所なき強き心力を養成することを得るなり。

第三節 丹田に力を集む

神閑に氣定る所、腕中一點の邪念なく氣海丹田に力を充たす、是れ技術の言妙なり、敵を制せんとするものは、丹田に力を調へるなり、丹田に力を調へるとは、呼吸を調へ其處に心氣を集め虚心坦懐一心乱れざるにあり、此の丹田の力によりて、活動する所、劍理を悟りて、其理を忘れ、實相を悟りて、實惣を忘れ、恰も鳥の空を忘れて、自在に飛び逍遙するが如し、故に如何なる強敵と雖も、敢て恐るゝ處なく、其離合進退は實に水火を辭せざるの活動となるなり、即ち呼吸を調へるときは、姿勢自然の真直、全身彈發力と爲り、剛氣にして清淨無垢なる實質をして我心體に歸せしめるなり、故に敵に心を奪はれず、敵の變形に動轉せず、故に整然たる構紊乱することなく、正法正道に従ひ、諸技法百法猶しく通じて障碍する所なきなり、去れど息を吐く體は力弱く忘想胸裏に往來し心は爲めに麻の如く乱れ、收拾すべからざるに至る。所謂一心に油斷を生じ其丹田の力を缺く時なりとす、故に五官悉く中樞精神神經に統一し、一心の乱れざることに力め、敵の處作に心を乱さず、一心統一するは、丹田の氣息を調へるの要路なり、丹田の力調へる時は強敵前に控ゆるも平

然として恐れざるの膽力となり、敵の所作に應じ變ずる時餘裕綽々として毎戰期せずして敵を以るなり、須らく業を練り敵を制せんとするもの、丹田に力を籠め、凜として隙なく、敵の刃に對して情波識浪を一掃し、殺活自在たらしめるなり。

第四節 個性的精神の斷滅

氣は靜止にして、心は活動の工夫なり、或は氣は正智の動力にして、心は正智の地盤なり、敵を攻撃するときは、寸毫も邪念なく、彼れを打つ突く受けると云ふ時は、先づ自己的慾望を斷滅すべし、慾望は一念動き、心に隙を生じ、恐怖を感じ、却て己れの安定を危うからしめるなり、故に私的觀念自己の一切の慾望を斷滅し、無我の心相の境に入るべし、無我は心海一切の善惡を捨て入神の境界に於て、心念起らず、頭腦透明なれば離合進退道を離れざるなり、去れど初心者の練習は思惟憶想を以て、自ら心身を苦め敵愾心を起し憤怒の情に制せられて以て、神聖なる自性に歸りて、其本然を守ること能はず、故に心を靜め、氣を凝くし其の神を凝し、念を全ふし、自己的精神を斷滅することに力むべし、所謂無我に入り私利私慾の念を斷ち意馬心猿の妄動を防ぎ、實雅豁達の氣

象を養ひ、以て玄妙を全ふすることを得べし、此點に於て劍術の修業は實に活きたる座禪なり、凡そ劍術の養成は、以上の精神即ち心想事成を現化せしむるに外ならず、故に初心者は、其の練習間智識を含み、判斷識別推理によりて、其の業を練磨し、種々雑多の中に、自然此精神を研磨し、以て圓滿的、果斷的、識別的活動を爲て、以て自然眞理を會得し體得すべし。

第五節 氣の移り

互に竹刀を合し、苦辛慘憺の活動を爲し、生死の問題を解決するには、其の氣を失ひたるものは如何に巧妙なる活動と雖も、無用の意義あり、故に吉凶、得失、長短等の相對的事理に通じ、障礙する處なきを要とす、而して相對する時は、其の巧妙なる業は生氣發動すること唯一心に歸着す、力を合する時は、瞬時氣を清くすべし、氣清ければ柔軟なる袋の如く、敵の處作に隨つて之を用ゆるを得べし、此に於て巧妙なる活動を爲し、身を守ることを得ん、第一圖の如く雙方相對し、間合を取りたる時、勝敗の決する迄應變を繼續すること一氣を以てし、又其の起りて直に應じ變するは氣の移りによりてすべし、之れ自然の働きにして、間斷なき戒愼を生ず、下の圖解を見よ。

間合に立ちたる構形は、恰も磁場内の、陽と陰に別れたるが如し、陽陰の異性にして初めて戦ひを生ず、故に構へ同一なれば、氣位同様にして不戦なり、同一状態より異性に攻する時は、自然敵氣を引き付けることを得即ち體の變化する處、其氣移るなり、氣の移る處隙を制す、之れ自然の理なりとす、即ち變化は氣の別る處にして隙を生ずる處なり、所謂氣を我れに引き付け直ちに利する處なり、變化は氣の變化にして即ち是非の分る處なり、其の隙を制するは氣の移りを制するの外ならざるなり、初心者變化の際、其の形狀に氣を注ぎ、其の自己の處作を忘る、故に變化の際氣の移りなく應ずること能はざるに至る、彼の進歩する順序によりて、之を實行反復するに従ひ、其の刺撃するの方得意となり、其の業を會得し初めて敵の動作の如何により瞬時透間なく之れに應ずるの氣の働きとなる、所謂氣は變化の際、迷ふことは絶對に不可なれど、是非利害の眞相を悟り其機宜には紙片の如く移りて正を失はず、而して氣の移りは應事接物如何なる場合に於ても缺くべからざるものにして、間合の刺撃攻制法又は接觸の斬撃の方法は、氣の移りによりて適切に業を施すなり、其の氣の移りは敵氣の先を掛けるにあり、之れ移りの活動なり、而して間合に於て相互動かす、對する時は差別を掃蕩したるものにして平等なる位なり、去れど平等中陰陽に別れ、虚實變

化を生ずるは是れ差別なり、故に差別を生ずる刹那は、透間なく石火の如く氣移り突撃變撃を施し敵を制するもの先を制すと云ふ、之氣の移りによる道理を見るに外ならざる活動と云ふべし。敵に對して勝負の決する運命は、實に此の氣の移寫の石火によれば間合に於ける進退は、尤も慎重に寸時も粗暴輕卒なるべからず、又間合の遠近に於ける戦法の利害を工夫し其の業を施すの此の機を習熟すべし。

第六節 進退の要心

彼我相對して離隔し接近するは進退といふ、進退距離の如何によりて、敵に斬撃を施すの活動を自由とす、即ち進むべき機を知りて、進むは時を失はざるなり、退くときに退くは後を全ふせんがためなりと云ふが如く、進退は未發に制し、或は防拂し或は變撃するの業をして誤らざらしむる身體の活動と見るべきなり、而して此の進退の間、業を施すに尤も有利なる法あり、譬へば中結以内に追込みて、攻制する場合は敵も亦突撃を容易に施すの位置なり、敵の刺撃を施すの位置は我亦刺撃を自由に施し得る間合なり、故に其の間に進み其の隙の先を制すること敢て難事にあらざるものな

れば攻撃は其の間に進みて施す事尤も有利なる物なりとす、此の間より手許に入り進退自在にすれば敵氣を未發に制し又敵の隙に向つて速かに打込む事を得る事明かなり、此の進退を掛引と言ふ、試合に於ける勝敗は此の進退の巧妙なるによるべし、即ち敵を攻め我れ不利なる時は退却して堅固なる青眼構を守り我攻め敵固守する時は其の堅壘を破り潰撃す、是れ進退の自由なるに基くなり、茲に自己の攻勢の正確を失はず敵の跋扈跳梁を防ぎ以て其の勢力を破り隙に乗ずる事を得るなり。斯くの如く一進一退一上一下敵に攻撃或は應變するは此の進退によりて施術すべし。即ち左の心得によりて練習すべし。

- 一、青眼の刀尖合したる時は下段及び中段に變形して攻進し敵の正構を破るべし。
- 二、攻進して敵の氣を釣り込むは中段青眼の變化を連続し敵氣を其の形狀に奪ふべし。
- 三、敵中段下段に攻める時は其の刀の上に刀を乗せ咽喉に着け攻進す之れを攻め返すと云ふ。
- 四、接近して鏢摺り合ひの場合は敵の我刀を押し兩手を伸ばしたる時其の鏢摺り合ひの状態より右拳を返し水平に左拳を體に引きて胴を打つべし。

氣の迷はざる事は劍道の尤も大切なものなり、即ち氣迷うは鏡の明かなる塵埃のために掩はれ其の明を失ふが如し、故に其塵垢を磨けば舊に仍て瑩徹すると同一なり、即ち氣の止まらざる事は敵の形狀に氣の止まる事にして氣止まる時は自己の活動する體を失ひたる時なり、是れ活動の誤りなり、故に氣は大度鴻量にし敵の眼を凝視し而も氣其處に一途に集中すれば自ら全體全形又は其の動靜を察知し敵の活動に氣止まらず而かも其處作に應じ又敵の活動の表に超然として攻撃する事を得べし、故に一心に氣を集むべし、憂悶する如き迷執を自制し氣を雄大にし克己以て練習すべし。

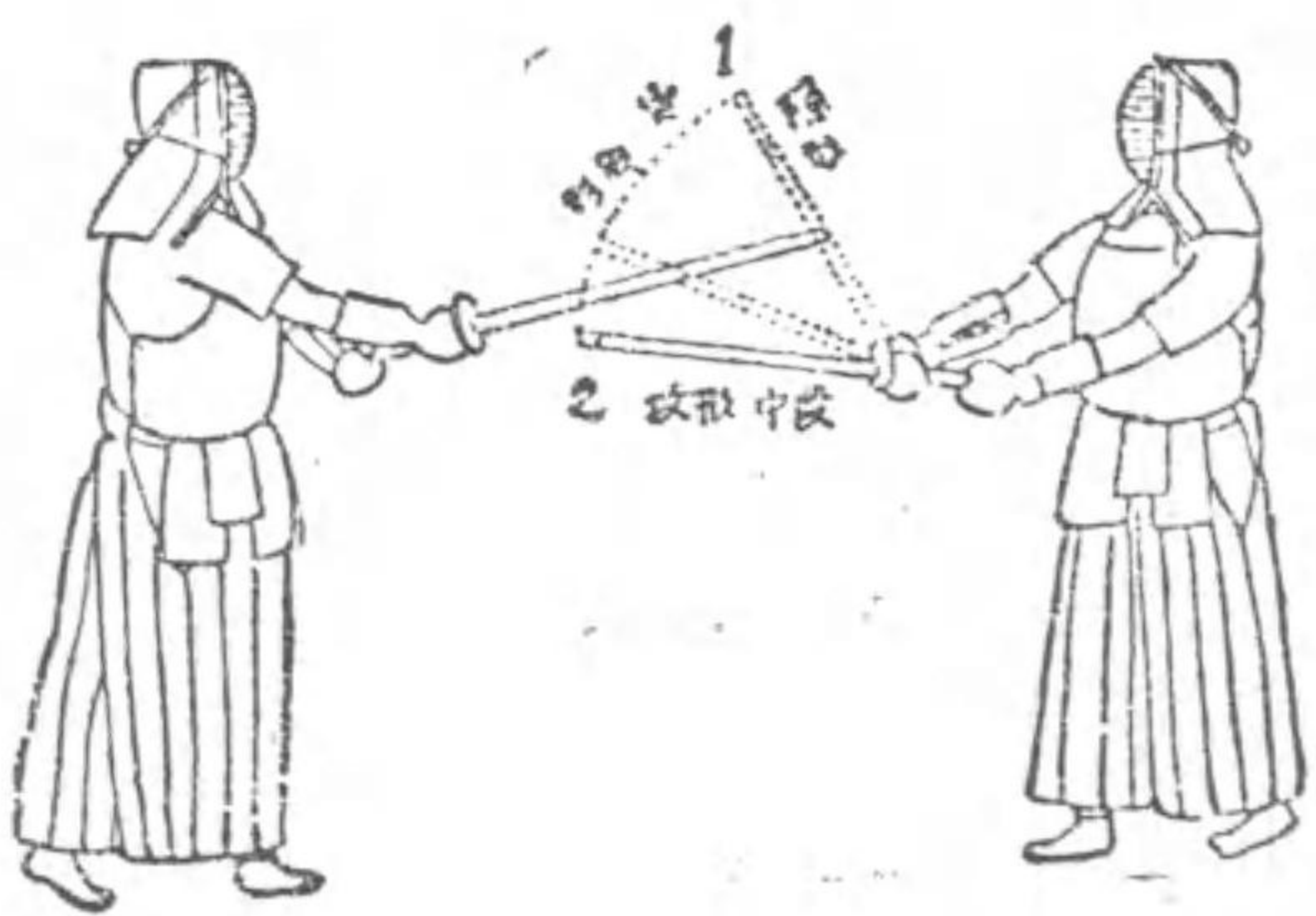
第八節 同合の隙

活動は充氣と油斷なき心と伴はざる物皆隙と云ふ、而して隙の氣は動作に依りて眼に觀察する事を得べし、其の隙の動作を見るに四あり即ち青眼を中心として刀を上げたる場合、下げたる時左右横に外したる形狀は其の變化の瞬、其隙の一方に隙を生ずる體勢なり、攻勢によりて其の崩れたる體勢には必らず氣我が形狀に執着し防拂せんとする意思ある時は妄想ある隙體と云ふべし、若し無我にして敢然として心動かざる物は形狀に變化なし、故に敵の攻撃するの隙間なしと云ふべし、殊に徒

らに刀を振るは却つて自己の心を動かし狼狽し自縛するに至る、故に刀を振り又はその青眼を崩す事を慎むべし、故に構刀は動かさず氣を静め以て敵の變形を刺撃し以て制すべし、刺撃せんとする時敵の正構又は攻勢に對し矢鱈に打ち込むは盲目的の打ち込みにして敵の爲めに悉く制せらるゝに至る、左に變形の隙を制するに利益なる方法を詳解せんとす。

一、競争及決勝點

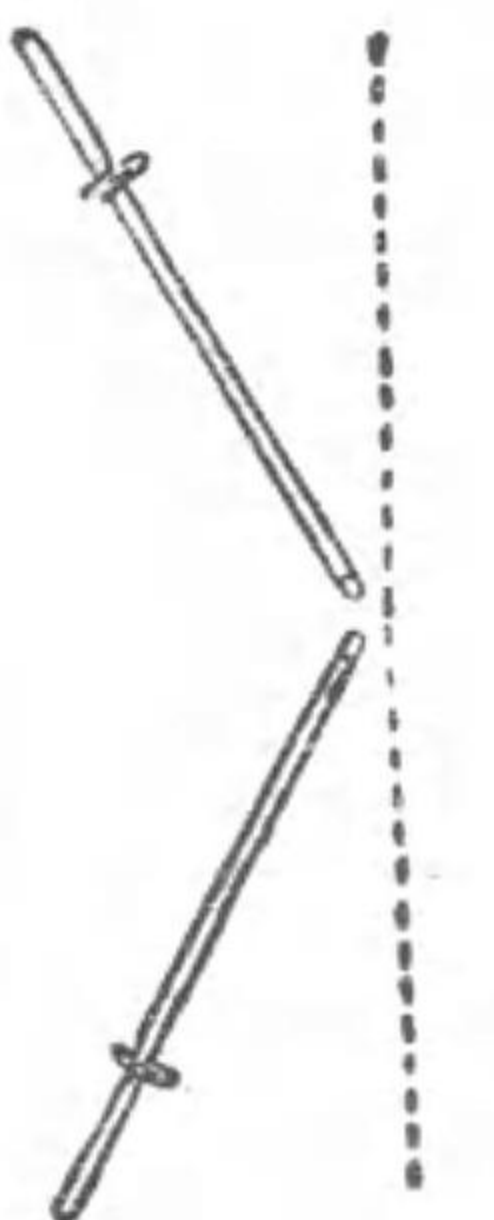
競争とは刀尖にて互に攻撃刺突せんとして死活を争ふ時之れなり、之れを競争の起點とす、而して其の競争に勝たんとするには強體と剛氣に依りて弱氣を攻め或は刺撃するに在り強體とは敵に對して隙を生ぜざるの體形にして剛氣とは敵形狀の如何を問はず迷はざる氣なり、而して強體は青眼より中段又は咽喉に刀尖を變形し攻制する體勢なり、圖の如し、其の體勢は氣を緊張せしめ油斷なく且敵氣を破らんとするの體勢なり、故に形狀は自ら其の侵入を防ぎ其氣を制するの強體と



す、剛氣とは其形勢の間敵攻撃せんとすれ共敢て動ずる事なく其の起りを制せんとする即ち敵斬撃せば其起りを撃き破ると云ふ一氣なり、此の氣と動作と合致して威風堂々として敵の氣を壓するなり、之れを優勢にして勝つ氣なり體なりとす、而して弱とは之れに反し打たん突かんとする慾心より青眼の刀尖を上に向け或は刺撃せんとする状態にて躊躇する形状なり、此の形状は氣自ら浮き且其の刺撃せんことをあせるなり、即ち圖に示したる刀の上に入り崩れたる状態なりとす、所謂争ひに勝つとは強を以て弱を制する處なり。以上の圖に示すは形構を側面より見たる圖なり、青眼より中段に變形するは右手を稍や下にし、其の下す反動を以て攻制變撃すべし、又中段變化は青眼の實體を崩さず敵の處作に對して直ちに應ずるを得べし、若し上へ上げる時は敵の侵入容易となり極めて弱き體となるべし、故に中段によりて敵を弱に陥らしめ強を以て制する事に力むべし、尙ほ左の詳解に依りて利害を了解し以て敵を制する事を了得すべし。

一、相青眼（競争點）

刀尖は上の水平線を脱出する時は隙體なり、實體は水平線下に刀尖變化するにあるなり、之れを上下の變化と云ひ虚實瞬時業施すの變化と謂ふべし、而して正面より見たる左右の側面に刀尖崩れ

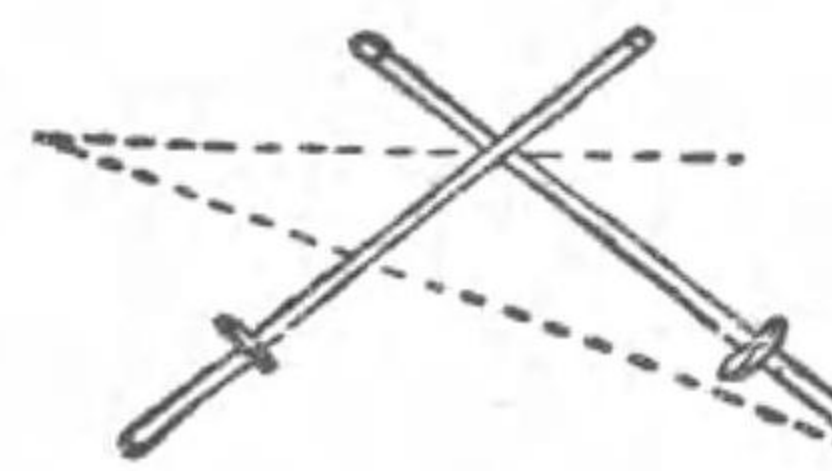


たるは虚にして隙體なりとす。

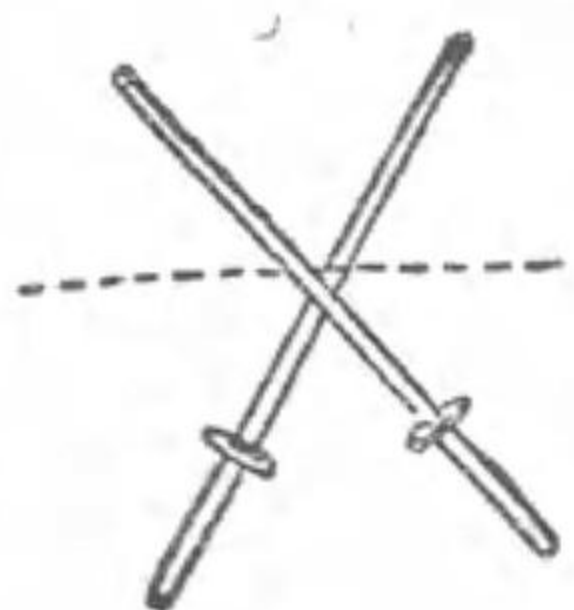
二、刀尖の交叉（第二決勝點）

交叉點に水平を畫き之れを同一の力の合致とす、此の場合合は刀尖を下にし咽喉に刀尖を着けたる時強體となり交叉の儘なる時は強體なり、即ち圖の如し。

三、接近の交叉（第三決勝點）

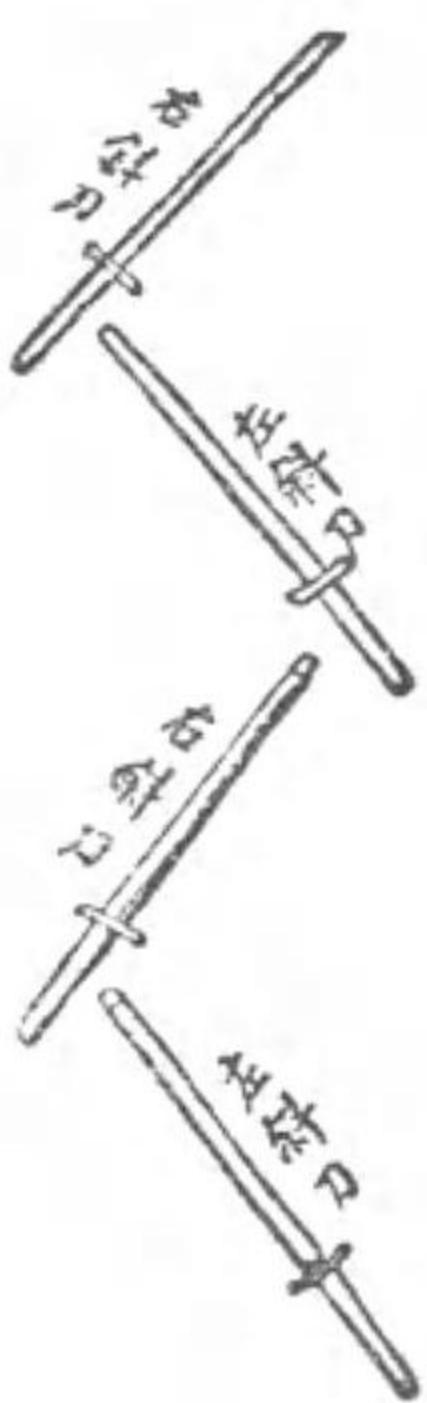


交叉點は力の合致なり、其の竹刀を押せば刀勢破る、斜に押す時は敵の刀を外すことを得べし、而して此の交叉の場合交叉點より直ちに竹刀を返し又は變化するによりて強體となり、兩手を伸ばし或は更に上に取るは隙體とす。以上説く處の第一は競争點にして第二第三は決勝點なり各間合に於て一上一下争ふは、強弱の戰にて



勝敗するの間合なりとす、而して決勝第二の間合に於ける防拂は刀腹を以て防ぐものなれば極めて力弱く第三の間合の如き接觸は完全なる防拂すること能はず、故に此の刀の防拂は圖の如く斜刀によりて敵刀を外し直に斬撃すべし。

正構體



第九節 接近の隙

間合あらざる接近したる時は正構の刀を自然堅立とし刀腹にて敵刀を押し來るを制するなり、接近の業は離れ際に於て斬撃すべし、左に術を施すに容易なる場合を擧ぐべし。

- 一、接近したる時打たんとし竹刀を上げたる時は敵の形状極めて弱し故に防ぐ考へを持たず其形状の甲手を打つべし。
- 二、接近したる離れ際には胴を打つべし。
- 三、接近したる離れ際には甲手打ち面を打つべし。
- 四、敵固守にて正構に復す時は刺撃すべし。
- 五、敵の刺撃せんとする勢刀には其の起りを斜に押へ其活動を壓制すべし。

- 六、敵の體當を以て攻むるは竹刀にて斜に體を押し之れを外し壓制すべし。
- 七、敵の體力の業は其の未發に制するを要とし必ず我形勢に其の氣を奪ふことに力むべし。

第十節 自己の注意

業により心の迷ふは自ら大敵を作るものにして敵に兵を貸し盜に糧を齎らすに異ならず、故に先ず自己の心界の迷ひを消磨し盡すことに注意すべし、迷ひを去ることは凡そ左の三項とす。

- 一、防がんとすること
- 二、打たんとすること
- 三、思料に過ぎること

此の三項は何れが一あるも皆自己の心を迷はすに至る、即ち「防ぐ」「打つ」「思料に過ぎる」と云ふ時は自己は敵の形状變化に注意するときにて他に注意すれば自然自己を忘るゝが故に自己の活動を誤るなり、能く練習者に肩怒り體曲り異様の姿勢を固執するは、心の迷ひの體現にして迷ひの一に偏する時なり。

敵に對するときは此の三項を戒め、業の理法に従ひ敵の隙の機敏に處作すれば思はず知らず又無理なく打ち込むことを得べし、生死を賄する間所謂身を守り或は打たんとするの氣の起りは邪心にして其の動作の間に油断と間隙とを生ずる處なり、身を捨て理法に従ひ活動せば不知の間打ち込み心の本體は其の慾心に離れ敵の處作に應じ時機を誤らざるなり、所謂死を覺悟して却て生に還り危を踏んで却て安らかとなるとは邪心なき働きを謂ふ、夫れ自己の心に迷ひ起らざれば非む處換はず處心和し意伸ぶるが故に何物をも思はず無念無想一途の心にて活動するを得べし、之を業に心を迷はざると云ふ、去れば敵の形構如何を論ぜず青眼にて從容として敵の隙に處作するの妙を得べし、敵深く侵入して我心を迷はざんとするもの却て隙體なれば其起りを打てば却て容易に勝を制するを得るなり、故に敵深く侵入する構形に迷はざれば敵の意圖を破り術略を制す是れ即ち禪家に所謂「他の槍頭を把て倒まに人を刺すの謂なり」之れ敵の邪心を無我無心にて制したるなり、我心に思ふことあるときは邪心の活動となり自ら隙を作るが故に何事をも思はざるを要とす。

第十一節 放心と殘心

第一 放心

人性は即ち理なり理は本と善なり生來具足す、但だ中間氣稟の爲めに前に拘はれ物慾の爲めに後ろに蔽はれ而して原始受くる所の理は爲めに蔽蝕せらるゝに至る、故に竹刀を採り術を學ぶには其中庸の心を蝕する所の物慾を決し去りて以て其本體に反るなり、譬へば月の雲霧の爲めに蔽はれて其の明を失ふや、其雲霧を掀けば則ち舊に仍て清朗なるが如し、先づ敵を制せんとするには自己の思想を靜止すべし、心を安靜の地に置くべし、物慾を制し心を一途に集中し總て散乱せしめざるにあり、是に於て心體の明は月の雲霧を掀き去て清朗なる如し、之れ本心に歸したるなり、孟子の所謂放心を求むると云ふも亦之れに外ならず、此の如くにして初めて思想は靜止し敵の動靜が明鏡止水に映り來て寸毫も漏らざるを得べし。

斯の如くにして心定まり氣落ち着き一心乱れず胸中敵もなく形もなく應事接物縱橫無盡の働きをなす、是れ眞に劍理を悟りて劍理を忘れ一切の善惡の境界に於て信念起らず而かも敵の處作に應じて正を失はず機に臨み變に應じて而かも劍理を全ふす、是れ不意識即ち無意無想の發作なり、畢竟するに吾人の劍を採り上段より刺撃するの刹那は其の性の初めに復し點を除き善の心體の活動なり

に心を動かし體に弛みを生じ、異様の醜體を演ずるに至るなり、先づ心氣を養ひ以て其の至極の技能の玄妙に達すべし

放心の事 孟子の一節

孟子曰、仁人心也、義人路也、舍其路、而弗由、故其心而不求知、哀哉、人有鶏犬放、則知求之、有放心而不求知、學問之道無他、求其放心而已矣、

(註の譯)

是れ孟子人を勉まして心に從事せしむるなり、孟子曰く人の一日も離るべからざるものは仁義に若はなし、而して能く仁義を盡す者は寡し是未だ其身に切なるを知らざるのみ、仁とは何ぞや。人各々自ら具ふるの心あり、而して其心とする所のものは、内其中正を存し、外其慈祥を著す任を以て、之が體と爲すにあらざるか、則ち任は即ち人の心なり、義とは何ぞや、人各々當に行くべきの路ありて而して其路とするところは、經事は宜きを主とし變事は權を主とす義を以て之が準と爲すに非らざるか、則ち義は即ち人の路なり、之を人心人路と謂ふは則ち是心る操り定路に遵ふ所以の者は宜しく其至りを極むべきなり、乃ち其路を捨て置いて而して由らす其心を

放ち失つて而して求むることを知らず、其人たるの理に於ていつくにか在る、亦哀むべきにあらずや、夫れ人若し鶏犬を放つては至輕の物と雖も、皆之を求むることを知る、以て必ず獲ることを期す、放心あるに及んでは、即ち此身に統攝する所なし、係る所至つて重くして反て其縱逸に任せ、出入の間に閑存することを知らず、何ぞ其れ至輕に明かにして而して至重に味きや、抑も心の其放つを聽すべからずして、而して放てば則ち求めざるべからざるを知る、凡そ學問の中知を致し、行を力むる其事一ならず、而して其道他なし心は一身の主宰より能く心の其正を得るものをして順以て之を養ひ心の邪に入るものをして慎み、以て之を開かしむれば、則ち視聽言動、皆治を心に受けて、而して苟もせず、此心の正に由て、而して適くところとして仁に非らざるなし、亦適く所として義にあらざるなし、積累して上達する爰ぞ難からんや、學問の要は放心を求むるに舍あるの外尙ほ復た他道あらんや、蓋し人の心の外に馳する者は其收みて而して入るを欲す、内に存する者は其の推して而して出を欲す、推せば則ち以て心の用を見るあつて、而して收むれば則ち以て心の體を立つるあり、體立ちて而る後用行はれば、則ち存養省察學問に従事するの大原に非ず郁。

處作の癖の事

前掲孟子の一節の註に曰く、心は一身の主宰なりと、因て思ふに、心は氣を使ひ、氣は體を使ふ體は即ち處作を意味す、然れば則ち處作の癖は即ち氣の癖にして氣の癖は即ち心の癖なり、故に處作の癖は即ち心の癖なり。

殘心の事

事に辛かることなく、心體不動の所を謂ふのみ、心體不動なるときは應用明かなり、那落の底まで打込むとも、我は元の我なり、心を容れて殘すには非らず、心を殘すときは二念なり。

餘先年去る兩大家の勝負を拜觀せしに、電光石火の裏にも、尙ほ且つ全精神力の二三十分若くは三四分を用ひて鬪ふが如くに見え一進一退矢繼ぎ早に戦へども、六七分の精神力は始終身内を離れず流汗淋漓勝負遂に決せずして引分けと爲れり、蓋し是れ殘心の妙處ならんか

第十二節 達 德

前述せる如く活動は心の表現なり、即ち心外に現れたるなり、去れば敵を制すると云ふも畢竟其

心を制したるなり、故に不穩の言語や威喝的動作を恐るゝものにあらず、却て上段等の強撃は一喝の氣合の下に倒すこと敢て不可ならん、既に言ふ心體の總ての能力を一處に集中し無念無想にして全く慾情を離れたるなり、故に誠心の態度は泰山の如く敵の術略や悉く一目に睨睥して敵の機宜に對し虚心平氣なるが故に自由自在に其の心を制するなり、危機一髪電光石火の竹刀と雖も悠然自若として心を牽制するに在り、是れ白刃を振つて向ひ來る敵と雖も擒縱活殺自在なるを得るなり。

此の精神たるや何によりて練磨するや、其本智仁勇の三徳を要素としその千變萬化の心身鍛錬の間其の心を自得するに在り、而して其三徳の要素は一に禮によりて心を養ひ又従つて勇氣發す同時に能く徳性を養ひ仁を禮するなり、故に邪を制し能く物の道理を悟り人性の踏道能く物に接し愛情の他に及ぶなり、是萬事の善道義の樞域なり、智仁勇の三徳具備して義禮信又一心の徳に歸す、人の執り守るべき常の分限を明かにし又衆と事を共にするものは義なり欺かず言行一致するものは信なり、心の無念は能く信と合致し實に不動の心理状態を爲す其働きは何等懽るべきものならずして實に應事接物持む所唯心に在りて所謂身を殺して仁を爲すなり、故に一進一退安心立命の境地に立ちて神速果斷敢行するを得べし、彼の千住觀音は心一にして千變萬化の働きをなす、人にして心體

の活動無碍無盡なるは一心發する所身體の活動十方に貫通するを得べきなり、是れ即ち人の性の至善を養ひ達して此に至るものにして終に聖域に入るの機は實に此に胚胎す、所謂良知良能を論ずるも亦是の謂なり、故に苟も心の本體に歸し然る後智仁勇の三達徳を悟得すべし、

三達徳の事

智仁勇三者天下之達徳也。

何をか三達徳と謂ふ、一に曰く智此道を知る所以なり、二に曰く仁此道を體する所以なり、三に曰く勇此道を強むる所以なり、此三者は天命の性天下古今同じ具ふる所の達徳なり、然も其の是を行ふ所以のもの、又唯一の誠なるに在り、誠なれば則ち眞實無妄なり。

又曰く、

自誠明、謂之性、自明誠、謂之教、誠則明矣、明則誠矣、

蓋し誠なれば則ち眞實無妄なり、眞實無妄なれば、則ち心體明かなり、心體明かなれば即ち正智開く、正智開くれば、則ち道を知り仁を體することを知る、人仁を體すれば、即ち内に常に疾しからず、外常に懼るる所なし、是則ち勇たる所以なり。

伊藤東涯著復性辯中篇の一節

(上略) 唐の中葉李翱字之復性書三篇を著はす、儒者の復性を言ふ此れ自り而して始まる。宋の程朱氏に至るに及んで専ら復性を説く、其意に以爲らく人生は即ち理なり、理は本善なり生來具足す教法を待たずして而して虧缺する所なし、堯舜より塗人に至るまで一なり、但だ中間氣稟の爲に前に拘はれ、物慾の爲に後に蔽はれ、而して原始受くる所の理は爲に蔽蝕せられて、而して聖人と大に異なるに至る、故に今日學問受用専ら其中間蝕する所の物慾を決し去て、以て其本初の體に反るを要す、猶ほ鑛の明かなる塵垢の爲に掩はれ其明を失ふや其塵垢を磨せば、則ち舊に仍て瑩徹す。又た月の光の雲霧の爲に掩はれて、其明を失ふや其の雲霧を掀けば、則ち舊に仍て清朗なるがごとし、此復性の説の興る所以なり、今其義を審かにするに凡そ復と言ふは、物の其本を失して而して初めに反るの謂なり、故に日月の蝕するや明に復と日ふ、疾の癒ゆるも亦復と日ふ、若し天下の人をして其初皆其聖人の徳を全ふして、而して後來始めて之を失せしむれば、則ち固より其性の初に復して可なり、然るに其胎を出で、地に墜つる時を原するに、呱呱として啼き、蠢々として動き是非を知らず、好悪を辨ぜず、及父母兄長を識ず、若し其性の初に復らんと欲せば、則ち固より惡の

除くべきなり、又善の長すべきなし。唯其の蠢々の中以て善と爲すべきの本具る故に、其稍長するや是非を分ち、好悪を辯じ、父母を見れば則ち之を親むを知り、敬長を見れば則ち之を敬するを知る、此れ人の性の善なり、而して物の能く及ぶ所に非らざる所以なり、聖賢と爲るべきの本此に胚胎す、所謂良知良能是なり、苟も以て之を養ふあれば則ち仁義禮智を成すべし、然らざれば即ち仁義禮智の徳を成すべきの本ありと雖も而も仁義禮智の徳を成すこと能はず、故に聖人は人をして其端の本心に就き擴けて而して之を充たし、其忍びざる所を以て之を其忍ぶ所に推し、其爲さざる所を以て之を其爲す所を指し以て其徳を成すを得せしむ。(下略)

第十三節 試合及心得

第一 試合の要訣

試合は互に攻防の術を盡し勝敗を決し以て業の應用を益々精熟せしめ自信力を増大し氣力精神を發せしむるに在り、試合に關する心得を左に述べ其の途をして誤りなからしめんとす。

一、試合者は禮節を以て無法卑劣の動作或は相手を侮蔑するが如き言動を爲すべからず。

二、試合は自己の全氣力、全技能を發揮し以て豁達勇壯に動作すべし。

三、試合の動作は威儀嚴然にして異様の姿勢を取り拙劣なる態度をなすべからず。

四、試合者は試合の前後に於て審判員の前を通行すべからず、必ず其の後を通行して試合場に入すべし。

五、試合は三本勝負若しくは一本勝負なり、何れの試合にても左の各項を遵守し試合を爲すべし

一、打ち込みて引き上げの時は残心を示し其の體勢を崩さざること。

二、引き上げの時審判の顔を凝視し又は手を挙げ後へ向く卑劣なる動作をなさざること。

三、相手刺撃不確實なる時又は卑劣なる動作により引上げる時正確に刺撃を施すときは勝となるが故に其とき隙さず打ち込み勝を制すること。

四、自己に輕きと觀念するときは正確なる二の太刀にて制すること。

五、足捌體當りは、敵の構形を施したる適切なる時機に施し勝を制すること。

六、組打ちは竹刀を落されたる時若しくは敵の竹刀を落して組付きたる場合に施すべし。而して組打ちは首を絞めて勝を得ること。

七、審判の判決に對しては絶対に異議を申立つることを得ざること。

第十四節 審判心得

- 一、審判の判決は神聖嚴正なる精神に由りて決すべし。
- 二、勝負は明瞭にして異様の姿勢を取り或は卑劣なる引上げの打ちは勝に算せず、此時相手方正確なる刺撃したる時は勝と決すべし。
- 三、足踏み組打ち及片手打ちは時機と適法なるときには勝に算す
- 四、判決は左右の手を膝の外に示して其の判決を明にすべし。

劍道圖解教範 (終)

昭和十四年四月一日印刷
 昭和十四年四月廿八日發行

劍道教範

定價金一圓八十錢

著作者 堀田捨次郎

發行者 櫻井均
東京市小石川區大塚町三

印刷者 田中誠一郎
東京市下谷區御徒町一ノ四

不許
複製

發行所 東京市小石川區大塚町三番地

大同出版社

電話大塚 二三二八番
振替東京四四九二番

柔道書の最高峰

増訂 柔道教範 改訂

本書は柔道の目的たる修身、鍊身、勝負の三法のうち難解な理論的解説をさけて専ら勝負術鍊磨に重點おをき、初歩より奥儀に至る秘傳を實技的に詳細垂示して餘す所なく、加ふるに施術の解説に當つては之を故山下十段、磯貝、永岡の各九段、飯塚、三船、佐村の各八段、安田大角故丸尾の各六段、久我、吉田、諏訪、佐藤の各五段、其の他東西に渉る斯界の猛者を一々カメラの前に煩して龍虎相搏つ實戰の急所極意を撮影し之を挿入し千變萬化の秘術を何人にも容易に會得出来る様公開した眞に斯界の最高權威書なり。

四六判クロース
金文字二百十八
頁寫眞百餘挿入
箱入

定價金一圓八十錢
特價金一圓五十錢
送料十錢 代引送料廿錢

ABCから會話まで 速成英語講義

英語を知ることには青年諸君の立身の基礎です。否既に現代人の常識です。英語を知らずしては日常の新聞雜誌の一頁すらも完全に讀めぬ現代です。まして將來の立身を期する青年諸君は何よりも先づ英語を征服すべきです。

本書は小學校卒業程度の人でもABCより樂々と上達する速成修學の書だABCの讀方書方から毎日朝の一時間、夜の一時間宛の努力で六ヶ月乃至一ケ年で中學程度の實力が樂々つく獨學本位書。

三六判クロース 定價金二圓
上製五四八頁 特價金一圓五十錢
送料八錢 代送料廿錢

389
186

終

